

日中戦争期における清水盛明のプロパガンダ戦略と 火野葦平

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味, 智英 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20745

日中戦争期における清水盛明のプロパガンダ戦略と 火野葦平

Propaganda strategy of Moriaki Shimizu and Ashihei Hino during the Sino-Japanese War

博士後期課程 史学専攻 2016年度入学

五 味 智 英

GOMI Tomoe

【論文要旨】

本稿では、日中戦争期の情報統制宣伝指導の中心であった陸軍情報部（内閣情報部兼任）の清水盛明砲兵中佐と兵隊作家・火野葦平に焦点をあてた。清水の宣伝理論と、国民的人気を博した火野の『兵隊三部作』の人間的でリアルな作風に接点があったのか、それが宣伝戦に如何なる影響を与えたかを考察した。まず清水の経歴や任務と、火野の報道部での活躍を詳述した。

清水は早くから国家総動員体制構築と、国民統合のための思想戦・宣伝戦の重視を唱えていた。さらに彼は情報宣伝促進のために国家的統一機関の必要を提唱し、情報委員会、その後の内閣情報部設立において中心的役割を果たした。

同時期、陸軍報道部班員に抜擢された火野は従軍記『兵隊三部作』が国民的人気を得たことで、国民の戦意昂揚、戦争完遂の国策に利用された。

清水ら陸軍情報部は、対外プロパガンダ戦略として火野『兵隊もの』の翻訳・刊行を各国で実行し一定の成果を挙げた。また世界的流行のグラフ宣伝雑誌の刊行に日本工房の名取洋之助と取り組んだ。

清水の評論文「対外宣伝と日本人」における対外宣伝に対する当局の認識、施策の貧弱さへの批判は重大な問題提起であった。

【キーワード】 日中戦争、思想戦・宣伝戦、内閣情報部、清水盛明、火野葦平

はじめに

本稿では、日中戦争期に陸軍省情報部、内閣情報部で思想戦・宣伝戦の理論家で実践家であった

清水盛明砲兵中佐（のち大佐）と、兵隊作家・火野葦平に焦点をあてて、彼らの活動を詳述し考察した。

清水盛明の諸論文、講演資料の研究から、筆者は国策遂行の志向は他の軍幹部と変わらないが、清水の宣伝理論と方法、プロパガンダ戦略にある合理性、近代性には注目した。

一方、清水にとって理想的な啓発宣伝媒体であった『兵隊三部作』の著者、火野葦平との接点、利用の視点から、清水の国家宣伝の様相を見ていきたい。清水と火野の直接交信の資料は皆無に等しいが、火野が家族に宛てた手紙や、その他諸資料によって彼らの接点の検証を試みた。

第一章では、清水盛明のプロパガンダ戦略について、彼の経歴とその部署の任務から、国家情報統制宣伝戦における役割を考察する。

思想戦・宣伝戦の歴史的流れをみると、第一次世界大戦後、国家総力戦の時代と言われ、武力戦だけでなく外交、政治、経済、思想戦にも注目されるようになったことは明らかである。

陸軍は1920年、臨時軍事調査委員会による「国家総動員に関する意見」¹を作成したが、その国家総動員構想案のなかで、「精神動員」は「国家総動員の根源」とまで述べており、「思想戦」の言葉も登場した。

陸軍省新聞班員だった清水盛明砲兵中佐は、陸軍パンフレット『国防の本義と其強化の提唱』（1934）において、早くから思想宣伝戦の重視に言及していた。

清水によると思想戦は「字の如く思想の戦ひでありまして、我が方の正しいと信ずる考へで、相手方の考へを打ち破り、自分と同じ思想なり、理念を抱かせる為の戦ひである」²と述べている。この思想戦により、国民を、あるいは相手を統合するのである。

日中戦争が長期化、泥沼化の様相を呈するなか、1937年末の日本軍将兵による南京大虐殺事件は、国内への報道規制、帰還兵への箝口令で漏洩を防げたが、日本軍の不祥事は海外では報道され、軍、政府はその挽回を図らなければならなかった。当時、陸海軍、内務省、外務省など各省庁の情報統制宣伝活動は個々ばらばらに行われ、統一には程遠いものがあつた。清水らが国家的統一機関の設置に向けて動いた事は後述する。

内閣情報部は国民精神総動員運動の強化を始め、日中戦争開始で対内対外向けにも思想戦・宣伝戦を実践する必要に迫られていたのである。

第二章では、1938年3月芥川賞受賞の兵隊作家・火野葦平が陸軍報道部に転属後に執筆した従軍記『麦と兵隊』³、『土と兵隊』⁴、小説『花と兵隊』⁵が国民的人気を博した活躍を述べ、軍への貢献や清水の思想戦・宣伝戦にいかなる影響を与えたかを見ていきたい。

清水は「宣伝は強制的ではいけない、楽しみながら不知不識の裡に自然に環境の中に浸って啓発教化されて行くといふことにならなければいけない」⁶と説いていたので、火野作品の「リアリズム」「ヒューマニズム」的作風が、清水のプロパガンダ戦略に合致し、彼の啓発宣伝戦を進展させたと考える。

清水盛明については、辻田真佐憲氏が「日本陸軍の思想戦—清水盛明の活動を中心に—」⁷の論

文で「陸軍が思想戦を研究し、そのための組織作りを主導していたが、誰が思想戦研究を深化させたかについて明らかでない、その手がかりとして、清水盛明に着目した」ことに筆者も共感した。

辻田氏は清水の経歴を詳述し、1926年清水の論文『国防』における彼の「戦争哲学」、海外での勤務が豊富で外国語に堪能な清水のドイツ、英国の国防論の博識について紹介している。

さらに辻田氏は1938年の内閣情報部主催「第一回思想戦講習会」における清水の「戦争と宣伝」の講演内容のユニークさを指摘し、清水が文化、芸術に造詣が深く、娯楽、慰安の必要性もみとめ、堅苦しいだけの宣伝を批判していることにも注目している⁸。しかし、辻田氏は清水が一貫して国家的情報統制宣伝の統一機関の設立を目指したこと、彼の起草文、また対外宣伝についての言及はない。

本稿では清水盛明の情報委員会、それが改組された内閣情報部での活動、火野葦平作品を啓発宣伝のため、大衆芸能分野へ拡大したことについても述べたい。

松本和也氏は、火野葦平の『兵隊三部作』の戦記テキストの文学的考察、同時代人の絶賛に近い評価や、火野作品の新聞広告の煽り立てるような宣伝文句についても詳細に紹介している⁹。

さらに松本氏は「昭和10年代の文学研究に於いて、キーパーソンは火野葦平で、彼が当時の文学場を方向付け、戦地の火野が戦争文学を発生させる最初の突破口を作った」¹⁰と指摘した。

五味淵典嗣氏は「ペンと兵隊一日中戦争期戦記テキストと情報戦」¹¹において、文学的考察のみならず、火野作品が社会に与えた影響、文学にも国策遂行の社会的位置が与えられた」と指摘した。さらに彼は自著『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』では、戦時下における〈戦争の書き方〉について、火野の『麦と兵隊』を石川達三の『生きてゐる兵隊』と比較しながら、石川は執筆禁止ラインの見本、火野の従軍記は描写の許容範囲の見本を示したと述べている。

筆者（五味）も、火野が予め提示された軍の「執筆禁止事項」を踏まえつつも、芥川賞作家の矜持のもとにリアルな表現をめざし書いたものであり、基本的には火野の文学者としての才能、人間性に依拠したものであったと考える。

第三章では、清水盛明の対外プロパガンダ戦略を考察する。陸軍が対外宣伝の一つとして、日本工房の名取洋之助と取り組んだ宣伝グラフ雑誌『NIPPON』ほかについて述べる。本稿の研究に、白山真理・堀宣男編集『名取洋之助と日本工房 [1931-1945] 報道写真とグラフィック・デザインの青春時代』（岩波書店、2006）が有用であった。陸軍のグラフ雑誌による対外宣伝を日本工房と協同していかに発展させたかを、貴重な雑誌の写真と解説で理解を深めることが出来た。

本稿で筆者が特に注力したのは、清水らによる火野作品の海外での翻訳・刊行状況と、その反響についてであった。ビルマ、フランス、その他の国々での翻訳、刊行については、南田みどり氏や渋谷豊氏はか諸氏の研究の一部を参考、引用し、その表示は明確にした。

1 清水盛明のプロパガンダ戦略

(1) 清水盛明の経歴と任務

清水の経歴は前記の辻田論文「日本陸軍の思想戦—清水盛明の活動を中心に—」から、陸軍省新聞班への異動までの経歴を引用、要約した。

1896年8月24日久留米市で生れ、父は陸軍歩兵中尉清水盛次である。陸軍幼年学校を経て、1917年5月陸軍士官学校を卒業した(29期)。同期には佐藤賢了、柴野為亥知、谷萩那華雄など、のちに陸軍報道部門の責任者が多い。1925年、陸軍大学を卒業、1926年3月に砲兵大尉に昇進、10月には清水最初の著作『国防』が出版された。12月参謀本部付となり、翌年12月参謀本部員フランス班に配属されフランスに留学した。1930年3月には国際連盟代表の随員としてジュネーブにわたり、1933年2月帰国、1934年3月陸軍省新聞班に異動した。上司には、軍務局長・永田鉄山、新聞班長・根本博がいた¹²。

1936年7月、清水盛明砲兵中佐らは情報統制宣伝の国家的統一機関をめざした情報委員会を設置し、彼は常勤事務官に就任した。翌年9月情報委員会は内閣情報部に改組され、清水は情報官となった。

1937年11月、日中戦争による大本営設置で陸軍報道宣伝組織と清水の任務はどう変化したのであろうか。陸軍では大本営陸軍報道部が編成されたが、陸軍省新聞班、内閣情報部はそのまま存在しており、その相互関係が分かりにくいので説明を加えたい。この三つの組織の関係、任務分担はどう変わったのか、本稿の中心人物である清水盛明情報官がいかなる部署にいて、いかなる具体的任務を担っていたのか、そのことは火野葦平への指導経路を考える上でも重要なので明確にしておきたい。併存している三組織の任務について、陸軍浜田平砲兵中佐は以下のように説明している。

- 大本営陸軍報道部 戦争遂行に必要な対内、対外並に対敵国宣伝報道に関する計画及実施
陸軍省新聞班 一、陸軍々政関係対内外宣伝の実施
二、対内外報道検閲取締
三、陸軍部内報道宣伝(新聞の編輯及発行)
内閣情報部 一、国策遂行の基礎たる一般宣伝の計画、実施
(之が為内閣情報部の宣伝実施機構を強化す)
二、宣伝報道に関し各庁事務の連絡調整
三、啓発宣伝に関する各庁事務の連絡調整
四、各庁に属せざる情報蒐集報道及啓発宣伝¹³。

大本営陸軍報道部は、部長の原守歩兵大佐の下、7人の部員と2人の部付きが配属され、全員は陸軍省新聞班と兼任となった。新聞班と似たような業務であるが、戦争についての対内、対外発表

報道を行った。企画課，宣伝課，庶務の3課からなり，清水盛明は企画課に配属され，任務は「蘇〔ソ連〕の輿論観察，宣伝に関する企画，旬報の記載，内閣情報部との連絡」¹⁴であった。

陸軍省新聞班の業務分担では，清水盛明中佐，多田督知大尉と竹田光次大尉は内閣情報部を兼任している。任務は「陸軍と内閣及関係各省との連絡情報交換，宣伝情報に関する業務実施，さらに国民精神総動員の計画及実施」であったが，具体的には下記のように多岐にわたり，戦争遂行を支える情報啓発宣伝の具体的な仕事であった。

一，情報蒐集査覈，整理，配布 二，内外輿論の観察，情勢判断 三，政府として行ふ宣伝の方針，策定 四，情報，報道，宣伝の連絡，調整及実施 五，同盟通信，放送協会の指導 六，民間各団体の指導 七，各種宣伝資料の作成 八，新聞，雑誌，映画，演奏の指導¹⁵。

以上からわかることは，清水盛明は陸軍省新聞班，大本営陸軍報道部，内閣情報部の三組織を兼任しており，国内外の情報蒐集，啓発・宣伝，一般マスメディアの指導，国民精神総動員の指導など，まさしく国家情報統制宣伝機関の中核にいて多くの任務を担っていたのである。火野葦平をはじめ，文化芸能分野の指導もあり，清水の任務の多さ，それをこなしていた清水の有能さがうかがわれる。

陸軍の情報統制宣伝の組織は，まず1919年に陸軍省新聞班が田中義一陸相によって創設され，1936年2月軍務局の一部局となった¹⁶。その新聞班が1938年9月陸軍省情報部と改称され，12月に清水は情報部長となるが，内閣情報部委員でもあった。翌年の12月には，在イタリアの日本大使館付武官に異動となり日本を離れたのである。

その陸軍省情報部が1940年12月には陸軍省報道部と改称，度々の名称変更であった。

(2) 清水盛明のプロパガンダ戦略

清水は新聞班員時代に，陸軍パンフレット『国防の本義と其強化の提唱』を永田鉄山の意を受けて起草したと言われている。

「国防観念の再検討」のなかで「国家の全活力を最大限度に発揚させるため，国家及び社会を組織し，運営することが，国防国策の眼目でなければならぬ」¹⁷と，国家総動員構想を述べた。

国家総力戦の時代において「思想戦は戦争指導上重大なる役割を持つ」として，清水は情報統制宣伝の国家的統一機関の設立を一貫して追求したのであった。

情報委員会の常勤事務官に就任した清水盛明砲兵中佐は，会を代表して「思想戦機関としての情報委員会」¹⁸の起草文を執筆した。その冒頭で「この情報委員会は，国家的情報宣伝機関の第一歩であり，各省庁，各団体が無統制に行っていた各種の教化宣伝運動を統制し，これに一貫した精神を与えて効率化するとともに，現時局に対応する新たな啓発宣伝を企画する」と記している。

清水は結びで「本委員会は永年の陣痛の悩みの後に生を得，漸く一，ニヶ月を経たる嬰兒で，こ

の嬰兒が偉大な働きを為すかどうかは、自体の努力は勿論各庁の本委員会に対する後援如何にある」と訴えている。いかに陸海軍、外務省、内務省などの縄張り意識が強く、統一が困難だったかを示しているが、清水の統一への強い意志が感じられる。

1937年4月19日、情報委員会は「国民教化運動方策」を發表し、「国体に対する觀念の徹底、日本精神の昂揚、内外情勢の認識、国民の志気の鼓舞振張等々」を提示し、その「宣伝実施要領」の次の文章は、清水盛明情報官の「戦争と宣伝」での一節を彷彿させるものがある。

宣伝は社会各種層（特に青少年層を重視す）に應ずる如く計画実施すると共に出来得る限り平易なる表現法を用ひ具体的事例、比喩、寓話等を用ひ印象的且興味的ならしむると共に露骨なる直接的宣伝を避け国民が不知不識の裡に宣伝の目的を自然に感得する如く努む¹⁹。

（下線は筆者五味）

上記の下線の「不知不識のうちに自然に感得する」は、清水が好んで使う言葉であり、なるべく平易に具体的にというのも彼の持論であった。

内閣情報部設立時にも、清水は「内閣情報部の組織と機能に就て」²⁰の文章を起草している。機能条項に「各庁に属せざる情報蒐集、報道及啓発宣伝」が追加され、任務が拡大された。

新たな機関として「宣伝省」設置の声もあるなか、清水は「先ず過渡的機構として内閣情報部の能力を十二分に発揚が焦眉の問題」と、現在ある組織を活用することが先決であるとの現実的、合理的な提案をした。「半ば天才的頭腦の持主である様な人的機構の完備が大切」と、清水が人材充実に提案したのは、当時の業務の多さに対して宣伝戦を支える人材不足、今後の養成機関設立などの認識からであろう。

清水の思想戦・宣伝戦についての講演のなかでも、特に注目すべきは1938年2月の内閣情報部主催の第一回思想戦講習会での講演「戦争と宣伝」である。

清水は「思想戦は戦争指導上重大な役割を持ち、宣伝は思想戦に於いて最も重要な戦闘手段とし、その宣伝対象は、対外（対敵、中立国、同盟国）、対内（国民精神総動員）である。宣伝実施で最も重要なのは、一定の主義方針の確定で固い信念を持って貫徹し、計画実施には、国家全般統一された組織が必要である。宣伝媒体の研究において、国民心理、国民各階層の特異性、対外的には民族心理の研究等、宣伝対象の研究が極めて重要」と、清水の宣伝理論の基本（方針の確定、統一組織、宣伝相手の個別的研究）が、簡潔に述べられている。

さらに清水は「我が国の教化運動はややもすれば抽象的觀念的であり而かも道学者式でやかまし過ぎ其の結果が一片の形式的の運動に終り勝ちであるのは残念なこと」²¹と批判しており、宣伝後の結果、効果の調査もすべきという指示は彼の先進的で緻密な思考を表している。

「宣伝の原則」の中で、清水は英国のノースクリフ卿が世界大戦の宣伝体験から述べている「第一に達成すべきは有利な雰囲気醸成で、この措置がなければ軍隊及び民衆の頭腦は宣伝の影響下

に立つことなし²²の引用に筆者（五味）は注目した。清水は火野著作「兵隊もの」や、火野自身への国民的人気によって起こった熱狂的な「兵隊人気」の雰囲気、マスメディアも動員して醸成したと考える。

これまでの研究から分かることは、清水は陸軍の幹部であるが、科学的合理的な理論家にして現実をとらえた実践家であった。しかし、それは戦争遂行へ国民をより効率的に統合する術（すべ）を心得た情報官であったということである。

2 陸軍報道部班員・火野葦平の思想戦・宣伝戦における貢献

(1) 兵隊作家・火野葦平が与えた影響

火野葦平（本名玉井勝則）は1937年9月10日第18師団小倉14連隊に入り、第十軍柳川兵団の杭州湾上陸作戦に従軍した。彼が出征前に書いた創作小説『糞尿譚』に芥川賞が決まったのが石川達三の「生きてゐる兵隊」の発禁処分事件があった1938年2月であった。火野の芥川賞受賞の経緯については、拙稿「日中戦争初期における『兵隊作家』火野葦平と陸軍報道部」²³を参照願いたい。

火野については、現役兵隊が芥川賞を授与されたことでメディアに華々しく取り上げられた。受賞後、火野が上海派遣軍報道部班員に抜擢され、徐州会戦従軍で書いた『麦と兵隊』、その後の『土と兵隊』『花と兵隊』が、300万部以上のベストセラーとなったことは周知のことである。

彼の作品はインテリ層の作家、評論家、学生から、男女勤労者、一般国民に広く受容された。新聞、雑誌での各界諸氏の絶賛、肯定的批評、さらには購買を煽る広告に、火野の圧倒的な人気を見ることが出来る。

同時代の評論家・板垣直子は「その年〔1938〕7月には、戦争文学の最も輝かしい一つの星が現れた」と火野葦平の文学的力量を激賞し、「ルポルタージュの流行と『麦と兵隊』の芸術的成功、及びこの作品の大きな社会的受容に刺激された当局は積極的に文学者をも国策に動員しようといふ計画を立てた。」²⁴と述べている。

火野の重要な「功績」は、従来の英雄譚ではなく、戦場の実相（一部であるが）や、下級兵士たちの生活をリアルに描き、彼らの辛苦を銃後の国民に伝え、双方の一体感まで生み出したことである。『麦と兵隊』『土と兵隊』に多くの惨苦が書かれていると、軍上層部の一部は不満であったが、火野は軍の制限範囲ぎりぎりまで書いて軍に認めさせた。これが戦争文学の一つのスタンダードとなり、他のルポルタージュや戦記物も暗黙の裡にそれに従った。

軍、国家は彼らの期待以上の火野作品で、国民に自然に「聖戦」「皇軍」を宣伝し、従来のどの戦記よりも効果的に国民の戦意昂揚を高め、国策に統合できることを学んだ。しかし、それは兵隊の一面のみの描写であり、暴虐な兵隊は全く登場しない描写は、軍にとっては都合の良い「リアリズム」でもあったのである。

さらに火野の「貢献」は、前述したように国家情報統制宣伝機関の思想戦・宣伝戦が国策遂行に有益であることを軍・官民の高官たちに認めさせたことである。

(2) 陸軍の思想戦・宣伝戦における火野葦平の利用

清水盛明は1938年4月には陸軍省新聞班、大本営陸軍報道部、内閣情報部で思想戦・宣伝戦を指導していた。火野が抜擢された上海派遣軍報道部もその指導下にあった。

火野葦平の人気に目を付けた内閣情報部は、漢口陥落を目指した会戦に著名作家を派遣し、第二の火野葦平の出現を期待した。1938年8月23日午後3時、内閣情報部は菊池寛を通して、20人ほどの著名な大衆作家の漢口従軍、「ペン部隊」の勧誘を兼ねた懇談会を持ったのである。清水盛明内閣情報官ほか、陸海軍、外務省の情報部幹部たちが在席した²⁵。

作家・白井喬二が『従軍作家より国民に捧ぐ』で、その時の情報官の勧誘の言葉を記している。「従軍が希望ならば、陸海軍部と協力して充分便宜な方法を講じよう。……従軍したからとて決して物を書けの、斯くせよのといふ注文は一切考へてゐない。全く無条件だ。勿論、国家としては斯かる重大時局に際し正しい認識が文筆家一般に浸透することは望む所であり、亦それが当然だとは思ふ。」と、「理解」にみちた誘いをかけられ、作家達はいたく感動したということである²⁶。

作家たちは都合のある一人を除いて全員参加した。新聞各紙も従軍作家たちが帰国するまで、「ペン部隊」のニュースを流し続けた。しかし、鳴物入りの「ペン部隊」であったが、「帰国後の作品は全体として見るべきものがなかった」と多くの評論家たちに酷評され、「火野葦平株」がさらに上がったことは言うまでもなかった。

軍があらゆる分野で火野を利用したことは、戦後、秋山邦雄元陸軍報道部長の次の一文が如実に物語っている。

火野葦平が一下士官であって、戦場の実相を伝え得る筆力を持ってゐた事、且つ、兵隊三部作を発表した以後に於て、兵隊にも一般国民にも異常な人気のあったことは、爾後、軍の宣伝報道に彼を利用することの有利たることを、我々に考へさせました。従つて種々の面で彼を起用しました²⁷。

以上は軍の本音であり、火野は文学者のなかでも軍に特別視されており、中国以外にもフィリピン、インパールなどにも派遣された。インパールから帰還した火野を杉山元陸軍大臣はじめ幹部たちが大本営に招き、彼からインパールの状況、意見を聞いている²⁸。

次の手紙は火野が中国から妻・よし子宛に送ったもので、間接的ではあるが火野に対する陸軍省の働きかけを知ることができる貴重な資料である。日付が欠落しているが、同じ内容の手紙を火野が実父・金五郎宛に書いており、その日付が1938年9月1日となっているので、陸軍省の手紙はそれ以前の8月中旬以降であろう。『麦と兵隊』がベストセラーになり、内閣情報部が「ペン部隊」の漢口派遣を決めた時期でもある。陸軍省情報部と内閣情報部兼任の清水らは、「国民的英雄」といわれる火野葦平の「兵隊もの」を他の娯楽演芸の分野にまで拡大して、「兵隊人気」の社会的雰囲気醸成を図ろうとした。さらには海外への宣伝にも言及していることは重要である。

今日陸軍省から「麦と兵隊」を歌にして、レコードに吹き込むから許可しろといふ手紙が来た。そのうち、レコードにもなるだろう。芝居は東京だけかも知れないが、松竹で作る映画は若松の方にも無論行くだらう。

「麦と兵隊」を今度、軍で、英語と独逸語に翻訳して海外に出すといふ相談を受けた。僕は自分がそんなにえらいとは思はないし、「麦と兵隊」もまずいものだと思ひ、恐縮してゐるのだが、自分でも驚くほどの反響で、少し尻がくすぐったいみたいだが、それでも書き甲斐があったと思ひ、非常に嬉しく思つてゐる。軍でも非常に喜んでくれてゐる。今、杭州湾敵前上陸前後の戦闘記「土と兵隊」を書いてゐる。もう少しで書いてしまふ。これは十月号には間に合はないが、十一月号の文芸春秋に出る筈だ²⁹。

(下線は筆者・五味)

上記の手紙から、軍が火野作品をあらゆる芸能分野に拡げていく計画を持っていることがわかる。陸軍省情報部や内閣情報部は、雑誌『改造』掲載の「麦と兵隊」の大評判を受け、迅速に多くのことを促進させた。単行本による出版、映画化、芝居化(新国劇、軽演劇)、放送化、歌謡曲化、創作舞踏さえ出現した。なかでも軽演劇の古川ロッパ一座は、火野葦平書きおろしの『ロッパと兵隊』始め「兵隊もの、軍隊もの」を多数上演し、それらが当たりして常に満員状態だった³⁰。

清水情報官は座長の古川ロッパと相談した結果、「劇の中に時局宣伝を加味して貰うこととなり、二時間ばかりの喜劇の中に5分ばかり支那事変の解説をやったが、民衆は笑ひながら見て居る間に不知不識の中に支那事変の意義を教え込まれる」³¹と効果的な宣伝方法を披露している。

内閣情報部は、『麦と兵隊』『土と兵隊』の劇化(「笑の王国」一座など)の際に、陸軍の情報官・鈴木庫三や、柴野為亥知を派遣して軍事考証などを指導させた³²。

日活による『土と兵隊』の映画化は、陸軍の実戦部隊の参加など、軍の全面的援助を受け中国杭州で撮影された。映画は昭和14年度文部省の特別優秀賞・金賞を受け、その選定理由書には火野作品に対する軍、当局の評価が余すところなく表れているので、以下引用したい。

『土と兵隊』は火野葦平原作に取材せるもので皇軍大陸に於いて戦ふ姿を真摯なる態度を以て描けるものであり、皇軍の力強い歩武を最も端的に表現した点に於て深き感銘を与へる作品である。この映画の持つ主題が国民へ呼びかける力は今迄のいずれの戦争映画よりも遙かに切実なるものを持つてゐる。かかる点に於て国民精神の昂揚にも資し、国家総動員態勢へ寄与するところも大きく、聖戦下に於ける昭和14年度映画界が創造した大作として強く国民の心をつ打つものであり、又、聖戦を記念する国民的映画の一つである。

ここに文部大臣賞中特賞映画としての独特の意義を見出す所以である³³。

映画と原作とは全く同一とはいえないが、火野葦平『兵隊もの』に対する軍、当局の評価が如何に高いか、彼らが惜しめない援助を与えて国策宣伝に利用していることが分かる。火野葦平の国策

への「貢献」の大きさを改めて認識する推薦文である。

さらに1939年版の『出版年鑑』に、「戦争文学を競って掲載した諸雑誌が、曾ての戦時に経験のなかった慰問品中の最も必需品として、広く前線に発送されたことも、雑誌界として世界的の新記録であった。」³⁴と記され、慰問品として火野などの戦記ものが大量に前線に送られたのである。軍隊の兵隊用売店「酒保」でも『麦と兵隊』『土と兵隊』などが販売されていた。戦場の兵士たちにも広く愛読されたことが、その感想を書きとどめた兵士たちの日記から明らかである³⁵。

兵隊に人気がある火野は上海や廣東で、兵隊向け新聞『つわもの』、『へいたい』の投稿・編集にもたずさわっていた。1939年南支派遣軍報道部が廣東で創刊した新聞『へいたい』に、火野葦平がしばしば詩や、随筆を投稿して現地の兵隊を鼓舞した³⁶。

火野や「兵隊」についてのマスメディアの報道合戦、火野帰還後の全国的な講演会、雑誌の座談会、対談の記事などが溢れ、火野人気の過熱と「兵隊」人気の雲田気が社会に満ちて、国民を戦争遂行にむけて統合しやすい状況が醸成されていた。

3 清水盛明の対外プロパガンダ戦略

本章では、まず(1)で、清水盛明の基本的な対外宣伝戦略について考察する。彼は講演で、同盟通信社の強化、海外の出先官憲相互の宣伝上の事務の統制強化、民間出先機関と官憲とが一丸となっていく宣伝組織の設定、外国新聞雑誌の利用法など研究すべきだと述べている³⁷。

彼は戦争の相手国だけでなく、同盟国、中立国に「日本の国策」を文化に包んで宣伝し、少しでも心証を良くし、戦争を有利に運ぼうとした。1937年末の南京虐殺事件による日本軍のイメージチェンジ、日本という国への理解に向けて、清水らは対外宣伝を強化していった。

まず、対外宣伝として当時世界的に注目されたグラフィック宣伝雑誌によるプロパガンダについて触れたい。(2)においては、清水のプロパガンダ戦略の有力な宣伝媒体である火野の『兵隊三部作』の海外刊行状況とその「成果」を考察する。対外宣伝媒体としては、映画、演劇、音楽、ラジオ放送、漫画などもあるが、本稿では以下の二点に絞った。

(1) 清水盛明の対外宣伝—グラフ国策宣伝雑誌刊行

軍や内閣情報部は当時海外宣伝として流行したグラフィック雑誌に注目し、国策宣伝に利用した。

日本工房の名取洋之助が、対外宣伝グラフ雑誌『NIPPON』を1934年10月、国際文化振興会や、陸軍省新聞班、参謀本部、海軍省普及部にもアプローチして創刊した。その後、陸軍や内閣情報部は名取ほか写真家たちを囑託として従軍に参加させた。彼等は名取らに民間会社を装ったプレス・ユニオン・フォトサービスを立ち上げさせ、費用は軍や関係省が出資した³⁸。

中支派遣軍報道部の馬淵逸雄班長によれば「内閣情報局〔部の誤り〕情報官清水中佐が南京攻略戦後、上海、南京方面を視察した」³⁹とあり、清水が写真宣伝戦略に関わっていたことを述べている。

グラフ雑誌には新進気鋭の写真家たち、名取洋之助、木村伊兵衛、土門拳ほかと、デザイナーも参加し、斬新な写真と構成で名勝地の風景、生活習慣、芸術や工芸伝統品、産業などあらゆる分野の日本を紹介し、企業の広告も毎号掲載した。グラフ雑誌『NIPPON』は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語で刊行され、日本語版もある。清水の持論の直接的政治プロパガンダではなく、文化を通しての宣伝にこだわったが、陸軍や海軍紹介など、軍関係の記事も少なくない。

1935年版の『NIPPON 5』に清水盛明署名の「L'ARMÉE DE SA MAJESTÉ」（皇軍）についてのフランス語の文章が、写真中心で6頁にわたって掲載された。

清水はこのなかで「皇軍を理解するために、神話、伝説及び歴史を通してその形成過程を理解することが必要と、古事記、日本書紀を引用し、天照大神の天孫降臨、神としての天皇、三種の神器を有する天皇の権威、神武天皇のこと、日露戦争時の捕虜に対する寛容、明治天皇の和歌、明治15年〔1882〕に軍人精神の基礎を思い起こさせ、帝国軍隊が世界の恒常的な平和を希求し戦っている使命感、帝国軍隊が天皇直轄の軍隊である。」⁴⁰と詳細に説明している。1935年は国体明徴運動、美濃部達吉の天皇機関説事件が起こった時期であったことが、清水の説明がより神話的な内容になったと思われる。

1938年清水は『NIPPON 日本版』に評論文「対外宣伝と日本人」⁴¹を掲載し、日本人の宣伝下手、対外宣伝の不振を述べている。彼は「中国が如何に上手にデマ宣伝を流し、日本は武力戦の勝利にもかかわらず、思想戦宣伝戦での戦果は思わしくない」と、中国の宣伝に押されていることを強調している。

清水は「日本人の国民性もあるが、官民の要人ともいざという時、宣伝をしり込みする。ヒトラーやムッソリーニに見習うべきだ。日本は宣伝の本質を知らず、重視しない。国家としての宣伝機構が甚だ幼稚で、内閣情報部は出来たが、まだ一元的大規模な宣伝を実施できる機構になっていない。全世界向けの宣伝網も確立せず、宣伝についての調査研究、養成機関もなく、研究者もきわめて少ない。一般行政費には十分な予算を配当するが、宣伝に対しては極めて貧弱」⁴²とあからさまな批判を公開していることは重要である。

清水はさらに米国への大々的宣伝の結果について「政治的 direct 宣伝は効果が挙がっていない。宣伝と判ったら、一切民衆は受け付けなかった。このような国には文化工作を介してやるのが上策、宣伝の威力は国家の運命にも関する機能を持つに至った」⁴³という記述に、清水の海外プロパガンダ戦略に対する思いが表れている。清水の意図は、対内的には宣伝のまずさ、遅れに警鐘を鳴らし、対外的には日本国民の「不言実行、言挙げせぬ潔癖性、控えめの美点」の徳の高さを強調していると、筆者には思われた。

日本語版では、清水は上記の「対外宣伝と日本人」のほか、グラフ雑誌への「推薦の辞」欄等にも登場している。同号には、上海プレスユニオンによる「中支戦線」の写真特集も組まれていた。他号では「日本海軍の成長」、「支那事変の意義」（『NIPPON』日本語版1937年12月）など、軍関係の記事が掲載されている。

清水は米、英、仏への宣伝について、鉄道教化団体連合会むけの講演「国防と思想戦」の中でも「イギリス、アメリカに対しても、政治的宣伝は必要だが、それと同時に彼等にとっつき易い方法でやる必要があるが、戦時になればなる程対外的には益々柔らかい方法で宣伝しなければならぬ、このような文化的な宣伝ならば、彼等は無批判に採り入れ、直ぐ飛びついて来る」と述べている⁴⁴。

清水は国、民族に応じて宣伝方法を変えること、宣伝臭が強すぎ、相手が興味を持たなかったら、文化工作から始めて彼らを取りこむ必要があると説いた。

グラフ雑誌『NIPPON』は、まさしく清水のプロパガンダ戦略に適したと思われる写真雑誌で、日本のあらゆる生活、文化分野を紹介したものだ。1938年2月、内閣情報部が国内向けに創刊した『写真週報』も同じ名取洋之助ら写真家たちに製作させた。

上記以外にも、陸軍が日本工房に委託した英文グラフ雑誌『SHANGHAI』、『CANTON』⁴⁵も発行され、後者には火野葦平の「Report of Hainan」〔海南島記〕が掲載された。その他『南支派遣軍』などいくつかの写真グラフ誌が刊行され、対象は中国人だけでなく、在位の欧米人向けでもあったと言われる。1942年創刊の東方社の『Front』もグラフ宣伝雑誌として活躍した。

対外宣伝雑誌『フランス・ジャポン』については、次の(2)で取り上げたい。

(2) 火野葦平『兵隊三部作』の海外刊行

日本における『兵隊三部作』の大好評で、陸軍省の清水らは火野作品の海外への翻訳・刊行を考えた。従来の戦記にはない兵隊、戦場をリアルに描き、「ヒューマニズム」的要素もあり、宣伝臭が少ないので海外向けに選ばれた。清水は日本軍兵士の「美しさ、立派さ」、「聖戦」を宣伝できる絶好の宣伝媒体と考えたのである。

1938年末には清水らは、すでに対外向け翻訳・刊行作戦に着手していた。同年8月の陸軍省から火野への書簡には『麦と兵隊』のドイツ語訳、英語訳の了解を求めてきたが、それを大きく上回っていた。火野葦平によると「1938～1939年にブッシュが『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』『広東進軍抄』を英訳してくれた。それをテキストに、ヨーロッパで独逸語版、スペイン語版、イタリア語版等が出版された。その後フランス語版、ロシア語版、其の他二十カ国位に翻訳紹介された。」⁴⁶と翻訳・刊行が拡大されている。

本節では、陸軍・内閣情報部が火野作品を海外へのプロパガンダ戦略として各国に翻訳・刊行していった実態を明らかにし、その宣伝効果をみる。

宣伝文章の翻訳についても、清水は「必ず有力なる外人の協力を得て、出来れば最初から此方の文章を伝えて外人に編集をさせるといふのが適当である」⁴⁷と、宣伝効果が挙がる翻訳をめざした。

早いものでは、1938年末にルイス・ブッシュの『麦と兵隊』の翻訳が完了し、翌年2月に研究社（日本）から刊行された。全体的にみても、刊行は1939年がピークとなっている。

① アジア地域むけ刊行

朝鮮では、「日本植民地時代の日本文学の翻訳が低調ななかで、1939年に戦争文学の代表作である火野葦平の『麦と兵隊』が朝鮮総督府の日本人〔西村真太郎〕によって『麦と兵丁』というタイトルで韓国語に移された。戦時状況を高揚させるために、市販で流通されている程度であった」⁴⁸と李漢正は述べている。

蒙古においては、1939年日本支配の蒙古連合自治政府の下で、蒙古会館から刊行されたのが「麦と兵隊」（『Buudai Kiged Cirig』）で、翻訳者・フールンガーは日本でモンゴル語教師を務めた経験がある⁴⁹。

「満州国」では、1939年「麦と兵隊」の中国語訳『麦田裡的兵隊』が、新京満州国通信社出版部から刊行されている⁵⁰。

以上は、日本の国策宣伝によるものと思われるが、読者の反応、宣伝効果は不明である。

中国では1938年12月上海の雑誌社から、哲非訳『麦与兵隊』が刊行された。火野葦平によると「共産系の雑誌社から無断で翻訳出版されたが、序文に『石川達三にくらべ、火野葦平は軍閥の走狗である』と罵倒されていた」⁵¹ということである。日本に侵略されている中国においても、火野、石川両作品とも早々と翻訳・出版されて、読まれていたのである。

一部であるが、中国の文学者、知識人の反応を紹介したい。

胡風（文芸思想家、評論家、ジャーナリスト）は、在中国の反戦活動家・鹿地亘に勧められた「麦と兵隊」（『改造』1938年8月号）の感想を述べている。「退屈きわまりない作品だが、兵士の苦痛と中国兵の勇敢さを暗示した一、二の描写を除くと読者に与えるものは、ファシズム式の麻醉にはかならなかった。結末は中国兵が捕虜となっても、なお決して屈しない場面で結ばれているが、作者はこれによって『私は悪魔になっていなかった』（「麦と兵隊」の一節）とみずからを慰めているにすぎない」⁵²と厳しく批判しているが、中国人兵士の勇敢さの描写は評価している。

軍人で、文学者の阿壠（アーロン）は、中国人の立場から南京事件をテーマにした作品『南京慟哭』を書いた。彼は中国在住の日本人文学者から、石川達三の『生きてゐる兵隊』以外に、また新しく長編のルポルタージュが出版された事を聞き、「偉大な作品が抗日戦争に生まれず、侵略戦争から出現したなど、とても信じられない。……最近の情報で火野葦平の『麦と兵隊』のことだと察しがついた」⁵³と怒りと共に、文学者として激しい競争意識ものぞかせている。火野著作は中国の文学者にもある種の刺激と緊張感を与え、火野への関心が高かったことを示している。

ロシア語版の『麦と兵隊』（ゲ・コシコフ訳）は1941年大連の南満州鉄道会社で刊行された⁵⁴。哈爾濱、大連にもロシア人が住んでいたので、満鉄が啓発宣伝として翻訳・刊行したのであろう。

ビルマにおいては、南田みどり氏論文によれば、火野作品の翻訳・刊行は以下の通りである。1942年『花と兵隊』と『土と兵隊』二作品ともルイス・ブッシュ英訳からビルマ語への重訳で、翻訳者はウー・ラ、出版社はチーフワイエー社である。日本軍監政部から日本図書刊行奨励金として、各々200ルピー授与された。

1944年刊行の『麦と兵隊』は、石本静枝英訳“WHEAT AND SOLDIERS”からの重訳である。訳者は、マ・アマー、出版社は上記と同じで、奨励金も同額である。ほかに『ミカドの義務』と新渡戸稲造『武士道』の刊行があり、各々奨励金200ルピーが出ている⁵⁵。ビルマ統治の文化工作に火野作品を利用しようとしたのだが、その効果についての言及はない。

② 欧米むけ刊行

英語訳は、日本在住の英国人、山形高校教師ルイス・W・ブッシュ⁵⁶と、日本人の妻、かねにより行われ、『Barley and Soldiers』（麦と兵隊、1939年2月25日）、『Mud and Soldiers』（土と兵隊、6月1日）、『Flower and Soldiers』（花と兵隊、7月15日）、『Sea and Soldiers』（海と兵隊、1940年9月1日）が日本の研究社から刊行された。

1941年、上記4作をまとめて『War and Soldiers』「戦争と兵隊」として、ロンドンのプトナム書店から出版された。その後の各国での翻訳は、ルイス・ブッシュ英訳からの重訳が多く、ブッシュ英訳の役割と貢献は大きい。しかし、何故ブッシュ夫妻が翻訳をすることになったかは、『Barley and Soldiers』の前書き「Preface」には述べられていなかった。清水が言う英語が良くできる人、つまり教養ある外国人の推薦を研究社に依頼して決めたのかという推測もできるが、現段階では不明である。

1944年に再び研究社から、井上思外雄英訳『Corn and Soldiers』（麦と兵隊）が出版された。その序文を火野葦平が書き、市川三喜の緒言（Introduction）には「最もふさわしい翻訳者として井上思外雄氏を推薦する」と記してあった。

訳者ノートで井上思外雄は、火野葦平の親友の中山省三郎の提案で翻訳をなし得たこと、市河三喜教授ほか、援助者への感謝を述べている⁵⁷。軍指導の下で、中山省三郎が火野の代理人として関与していたのである。井上の新翻訳について、火野は「太平洋戦争になってから、英人のルイス・ブッシュは敵国人だから、日本人が訳し直さなければならないということになって、研究社から刊行された。」⁵⁸と書いており、軍のこだわりが感じられる。

アメリカでは、1939年5月在米の石本静枝（のちの加藤シズエ）による英訳『Wheat and Soldiers』（麦と兵隊）が、ニューヨークの Ferrac Rinenartinc 社から刊行された。しかし、内容は変則的で「土と兵隊」の全訳と、「麦と兵隊」の圧縮訳との二部を合わせて一巻とし、その標題を『麦と兵隊』としたのである⁵⁹。

石本自身が、翻訳の経緯、アメリカでの火野作品の評判を「アメリカの『麦と兵隊』（『改造』1939年8月号）で、以下詳しく述べている⁶⁰。

筆者（五味）は翻訳の了解が、陸軍省情報部と火野の親友で著作権代理人・中山省三郎から得られたと、石本が明確に述べていることに注目した。研究社での翻訳と同様に、陸軍省情報部の指示であり、指導していたのが清水盛明情報部長であった。

石本は翻訳本の評価について「発売以来、ニューヨークタイムス、ヘラルド・トリビューン、ワールド・テレグラム紙等が相当な紙面を割いて紹介し、米国ジャーナリズムがこの全篇に流れる犯

しがたいヒューマニズム精神が人道主義的な米国人に慫へ、米国人の日本誤解水解に大いに寄与している。米国の批評家たちは『この書に宣伝的分子がない』と好感を寄せている」と書いている。これこそ清水盛明が望んだ対米向けのプロパガンダ戦術の効果であった。

石本はさらに、ノーベル賞作家のパール・バック女史の賞賛の言葉を伝えている。「火野作品に何等の宣伝もなく、勿体ぶったところもなく、自分の主張することは何でもかでも正しいと言い張らうとする風もない。……日本人を理解しようと思ふ人々に私はこの書の一読を薦める」とまで書いている。この『ニュー・レパブリック』誌（1939年8月1日付）掲載のパール・バックの感想を『東京朝日新聞』が報道している。

さらには、著名な日本文学研究者のドナルド・キーンも1942年6月、海軍日本語学校の学生時代に火野葦平の『麦と兵隊』を読み、いたく感動して日本軍を見直したと『声の残り 私の文壇交遊録』⁶¹に書いている。以上の評価を読む限り、火野作品が日本の戦争、軍隊への評価を変えるのに功績があったことがわかる。清水らの火野作品によるプロパガンダ戦略はアメリカのジャーナリスト、文学者など知識階層には一定の影響を与えた。

フランスでは日本の対外国策宣伝誌『フランス・ジャポン』（仏語）の存在が重要である。1934年4月に財団法人国際文化振興会が発足、10月に雑誌『フランス・ジャポン』が日仏同志会により発行された。事務所は、南満州鉄道株式会社のパリ事務所と同一住所、つまりは満鉄が『フランス・ジャポン』を資金的に支えていた。『フランス・ジャポン』は、政治・経済・軍事動向もとりあげ、プロパガンダ的な側面を有していたが、軍国主義を正当化する思想の宣伝媒体とみなされることに強い警戒感を抱いており、表面的には日本文学を幅広くフランス人に紹介することにあつた⁶²。

渋谷豊氏は、日中戦争期の火野葦平文学のフランスへの宣伝について、論文「フランスにおける日本文学受容の一側面 火野葦平の場合」において、以下詳しく述べている⁶³。

1939年『フランス・ジャポン』に火野葦平作品の翻訳、紹介が頻繁に登場するようになった。最初の翻訳が『煙草と兵隊』、次いで『土と兵隊』であった。その他、芥川賞についての解説、「日本文学・芸術に関する情報欄」では、『土と兵隊』映画化のニュースまで紹介している。

パリ在住の松平齊光が仏訳した「土と兵隊」は『フランス・ジャポン』第45号に掲載された⁶⁴。渋谷氏はフランスの代表的な新聞『フィガロ』紙に「土と兵隊」の作品紹介文と「抄訳」が掲載されたことを述べ、『フィガロ』紙の「全ての戦争はお互いに似ているという普遍的な性格に打たれる」と火野の「ヒューマニズム、戦争の普遍性」に言及している。当時フランスもナチスドイツとの戦争に直面していたのである。

『煙草と兵隊』は、日本外事協会刊行の英字雑誌「Contemporary Japan」1939年3月号に英訳が掲載、そこから仏語へ重訳された。戦場で煙草を渴望する兵士の心情とそれによって起こった悲劇に国境を越えて共感をよんだようだ。

以上、フランスでも火野の作品紹介は1939年という時期、満鉄支援の雑誌、さらに日本外事協

会の関与となると、日本の国策宣伝の一環であったことは間違いない。

第二次世界大戦開始後、1940年6月14日フランスがドイツに降伏した年に、満鉄欧州事務所がパリからベルリンに移転し、『フランス・ジャポン』誌もその幕を閉じたのである⁶⁵。

満鉄という大きなバックを持ち、豊かな人材を有しパリで国策宣伝を行った日仏同志会だったが、第二次世界大戦で日独伊の軍事同盟を結んだ日本に対して、ナチスドイツに占領されたフランスでは、日本の対外宣伝を受容できる余地はなかったと考えられる。

スペインでの火野作品の翻訳・刊行は、ピタルク・フェルナンデス・パウ「スペインにおける日本文学の翻訳事情」⁶⁶を以下参考にした。

初めてスペイン語に翻訳された日本文学が、1904年出版の徳富蘆花『不如帰』、それ以来1945年までの翻訳は3冊のみである。1908年の為永春水・二世為永春水著『いろは文庫』（四十七士の忠臣蔵）、1941年には「源氏物語」と、火野葦平著『土と兵隊』であった。ルイス・ブッシュの『Mud and Soldiers』からの重訳である。火野の「兵隊もの」が刊行されたのは、情勢から見ても日本のプロパガンダ戦略によるものである。1930年代、スペインは人民戦線協定が成立したが、1939年フランコ独裁が始まった。フランコ政権はドイツから軍事援助を受けていたのである。

以上、各国における火野作品「兵隊もの」の翻訳・刊行状況を述べた。しかし、火野が20か国での刊行と述べているので、まだドイツ、イタリアなど約10か国での刊行状況が不明である。

調査から言えることは、アジアでは、日本の統治機構による翻訳、刊行、ビルマでは日本軍政監部が啓発宣伝のため、奨励金を与えての刊行であった。

欧米では「出先官憲や民間出先」による翻訳・刊行であった。可能な限り、その国の有力新聞に掲載させるなど、国によって異なる手法を用いた。そのプロパガンダ戦略に、火野翻訳本を迅速に刊行するという清水部長の強い決意と方針を筆者は感じた。

各国での数少ない日本文学の翻訳・刊行のなかに、戦時期、特に1939年を中心に火野作品が登場した。このことから陸軍省情報部、内閣情報部が対外プロパガンダの目玉として火野作品の翻訳・刊行に力を入れたことが明らかである。特に火野作品を紹介・宣伝することによって、海外の読者にむき出しのプロパガンダではなく、自然に暴虐な日本兵のイメージを払しょくし、少しでも日本軍の見直し、日本への理解をうながしたことは、軍、政府の国策にとっては効果のあるプロパガンダ戦略であった。

おわりに

本稿テーマの研究開始時には、筆者は清水盛明と火野葦平との接点についての直接的な資料不足を感じたが、清水の対外プロパガンダ戦略を調査する中で、火野作品の海外刊行については、南田みどり氏や渋谷豊氏ほか研究者の別テーマで書かれた論文を参照し、対外宣伝誌『NIPPON』ほかのグラフ雑誌、国策宣伝誌『フランス・ジャポン』の存在で、清水の海外宣伝への深い関わりを知ることができたし、清水と火野とのつながりも見えてきた。さらに火野作品の研究社での翻訳、

アメリカの石本静枝翻訳の経緯からも、陸軍省の清水情報部長の対外プロパガンダ戦略が際立って現れた感があった。

筆者はこれまでの研究においても火野葦平『兵隊三部作』などの軍への貢献について言及したが、火野の国民の人気、具体的活躍の数々が、清水らの情報宣伝活動に対する軍官民の認識を深め、進展に寄与したことを改めて理解した。

清水のプロパガンダ戦略は、相手国の宣伝対象を研究・分析した近代的、科学的手法に、巧妙さもそなえ、火野の人間的で、宣伝臭の少ない作品を宣伝媒体として使ったことで、さらなる効果をあげた。国民の絶大なる人気を有する他に代え難い火野葦平という個性とその作品、そして宣伝戦の理論家、実践家ともいべき清水盛明の出会いはい偶然とはいえ、一時期の国家の情報統制宣伝活動と国策宣伝に大きな成果と影響をもたらした。

その一方、筆者は「対外宣伝と日本人」で述べられた清水による当局批判については、その発言の真意、背景については今後の研究課題としたい。

本稿では清水盛明情報官に焦点をあてたが、内閣情報部の情報官たちの全体像、活動は如何なるものであったか、その全体図の中における清水の立ち位置から研究すべきだったが、このテーマも大きな問題であり、あわせて今後の研究にゆずりたい。

そのほか、陸軍報道部が名取洋之助と組んで行った写真による国策宣伝については、先行研究も存在するが深めたいテーマである。

注

- 1 附録資料「国家総動員に関する意見」1920（大正9）年5月 臨時軍事調査委員会（拓殖大学図書館佐藤文庫所蔵） 額顕厚『総力戦体制研究 日本陸軍の国家総動員構想』（社会評論社、2018年）224～255頁。
- 2 内閣情報部委員・陸軍省情報部長・陸軍砲兵大佐清水盛明「支那事変と宣伝」1939年2月第二回思想戦講習会講演編集復刻版『情報局関係極秘資料』第二回配本（不二出版、2003年）37頁。
- 3 「麦と兵隊（徐州会戦従軍日記）」雑誌『改造』8月号に掲載。（改造社、1938年）単行本は同社で9月発行。
- 4 「土と兵隊（杭州湾敵前上陸記）」『文藝春秋』11月特別号（文芸春秋社、1938年）、単行本は改造社発行で同年11月。これは弟宛ての書簡体の形式をとった。
- 5 小説「花と兵隊（杭州湾警備駐在記）」『東京朝日新聞』夕刊連載1938・12～1939・6・24。単行本は、改造社で1939年8月刊行された。
- 6 内閣情報部情報官・陸軍砲兵中佐・清水盛明「戦争と宣伝」1938年 第一回思想戦講習会会議録荻野富士夫編『情報局関係極秘資料』第六巻（不二出版、2003年）171頁。
- 7 辻田真佐憲「日本陸軍の思想戦—清水盛明の活動を中心に—」編集 軍事史学会『第一次世界大戦とその影響』（錦正社、2015年）327～342頁。
- 8 前掲、清水盛明「戦争と宣伝」には具体的な宣伝方法が詳述されている。清水は1935年刊行の米国イェール大学の社会心理学者、レオナード・W・ドゥープ論文『宣伝の心理と技術』を参考にしたと五味は考える。ドゥープの翻訳論文は『内閣情報部 情報宣伝研究資料』第5巻（柏書房、1994年）1～409頁。佐藤卓巳「解題」参照。
- 9 松本和也「第17章 戦場にいる文学者からのメッセージ—火野葦平『麦と兵隊』」『昭和一〇年代の文学場を考える—新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、2015年）410～448頁。
- 10 松本和也『日中戦争開戦後の文学場 報告/芸術/戦場』（神奈川大学出版会、2018年）239～267頁。
- 11 五味潤典詞「ペンと兵隊—日中戦争期テキストと情報戦」編者：紅野謙介・高栄蘭・鄭根埴・韓基亨・李恵

- 鈴『検閲の帝国 文化の統制と再生産』（新曜社，2014年）292～311頁。
- 12 前掲，辻田真佐憲『日本陸軍の思想戦—清水盛明の活動を中心に—』328～332頁の清水の経歴を五味が要約。
- 13 「大本営報道部の任務」（昭和12・10・30 浜田中佐）編者・稲葉正夫『現代史資料37』（みすず書房，1967年）368頁。
- 14 同前，「陸軍宣伝機関業務報告 大本営陸軍報道部編成表，報道部員任務分担表」を五味が要約，369～371頁。
- 15 同前，「新聞班の編成業務分担区分表 内閣情報部派遣」より抜粋（五味）。374～375頁。
- 16 「陸軍省新聞班小史」上法快男『陸軍省軍務局』（芙蓉書房，1979年）489頁。
- 17 陸軍省新聞班『国防の本義と其強化の提唱』（陸軍省新聞班，1934年）2頁。
- 18 清水盛明「思想戦機関としての情報委員会」『偕行社記事』10月号（偕行社，1936年）35～43頁。
- 19 情報委員会「国民教化運動方策」吉田裕・吉見義明編集・解説『資料日本現代史10 日中戦争期の国民動員①』（大月書店，1984年）7頁。
- 20 清水盛明「内閣情報部の組織と機能に就て」『偕行社記事』12月号（偕行社，1937年）85～88頁。
- 21 前掲，清水盛明「戦争と宣伝」171頁。
- 22 同前，「宣伝の原則」177頁。
- 23 拙稿「日中戦争初期における『兵隊作家』火野葦平と陸軍報道部」『文学研究論集』第46号（明治大学大学院，2017年）109～126頁。
- 24 板垣直子『事变下の文学』（第一書房，1941年）26頁。
- 25 『東京日日新聞』と『東京朝日新聞』いずれも1938年8月24日付朝刊にて大々的に報道。
- 26 白井喬二『従軍作家より国民に捧ぐ』（平凡社，1938年）7～11頁。
- 27 火野葦平の公職追放への異議申立書と共に提出した秋山邦雄元陸軍報道部長の「証言」（北九州市若松区民館所蔵の写し）。
- 28 火野葦平「解説」『火野葦平選集』第四巻（東京創元社，1959年）426頁。
- 29 中国の火野葦平から妻・玉井良子宛書簡。北九州市立文学館所蔵を五味が撮影。
- 30 「有楽座興行年表」『東宝十年史』（東京宝塚劇場，1943年）
- 31 前掲，清水盛明「戦争と宣伝」175頁。
- 32 佐藤卓巳『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中央公論社，2004年）244頁。
- 33 「文部大臣賞映画」『映画年鑑 昭和編 1⑩』昭和17年版（日本図書センター，1994年）3～10頁。
- 34 『出版年鑑』昭和14年度版（東京堂，1939年）5～6，9頁。
- 35 筆者の調査では，木村源左衛門『日中戦争出征日記』（無明舎出版，1982年），村田和志郎『日中戦争日記』全7巻（鵬和書房，1984～1986年），俊正和寛『俊正利の従軍日記』（俊正和寛，2014年），小原孝太郎「小原孝太郎の日記」編者江口圭一・芝原拓自『日中戦争従軍日記—輻重兵の戦場体験—』（法律文化社，1989年）があり，それらの日記に火野葦平作品について記載があった。
- 36 『刀水』No. 6 復刻雑誌『兵隊』附録（刀水書房，2002年）。
- 37 前掲，清水盛明「戦争と宣伝」180頁。
- 38 編集・白山真理・堀宣男『名取洋之助と日本工房 [1931-45] 報道写真とグラフィック・デザインの青春時代』（岩波書店，2006年）ii頁。
- プレスユニオン・フォトサービスについて，カメラマンの小柳次一が「すべての費用は軍の機密費から出るが，中国は勿論，外国にも民間経営と見せかけるため当時，同盟通信社他外国新聞社，通信社の支局のあったフランス租界のビルに事務所を開設」と書いている。「追想」『追想 牧田仁』（文化工房，1978年）。
- 39 馬淵逸雄『報道戦線』（改造社，1941年）452頁。馬淵は中支派遣軍報道部班長だったが，後に報道部部长。
- 40 清水盛明「L'ARMEE DE SA MAJESTE」（皇軍）（フランス語）『NIPPON5』（日本工房，1935年）16～21頁。フランス語から日本語訳は井上陽子氏。清水の紹介文と写真は陸軍の将校，兵隊，訓練情景等8葉。
- 41 陸軍情報部長清水盛明「対外宣伝と日本人」『NIPPON2 日本版』（日本工房，1938年12月25日）45，46，47頁。同号には他にも宣伝に関する文が掲載された。小松孝彰「対外宣伝と国民性の問題に就て」，小西鉄男「支那より宣伝上手な日本の東亜宣伝政策」である。『日本版』は国内向で季刊雑誌。

- 42 同前, 45~46頁の清水評論文「対外宣伝と日本人」を, 五味が引用・要約したもの。
- 43 同前, 47頁。
- 44 清水盛明「国防と思想戦」『時局読本』(鉄道教化団体連合会, 1938年) 130~131頁。
- 45 『SHANGHAI』(1938年11月創刊, 陸軍の委託)『CANTON』(1939年4月創刊, 出資は南支那派遣軍報道部。両誌とも日本工房編集・製作。白山真理・堀宜雄編『名取洋之助と日本工房 [1931-45]』(岩波書店, 2006年) 82, 84頁。
- 46 ルイス・ブッシュ『おかわいそうに 東京捕虜収容所の英兵記録』の火野葦平「序 ありがたい外国人」(文芸春秋新社, 1956年)。
- 47 前掲, 清水盛明「戦争と宣伝」75頁。
- 48 李漢正「日本文学翻訳の様相と研究の行方」(特集 世界における日本語文学研究の現状と展望)『跨境日本語文学研究第5号』(笠間書院, 2017年) 106頁。
- 49 内田孝『『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動』『北東アジア研究』第14・15合併号(日本モンゴル学会, 2008年3月) 238頁。
- 50 本書の訳は雪笠となっている。編者矢富巖夫『火野葦平著作目録』(創元社, 2004年) 121頁。
- 51 火野葦平「解説」『火野葦平選集』第二巻(東京創元社, 1958年) 422頁。
- 52 胡風著『胡風回想録—隠蔽された中国現代文学史の証言』(論創社, 1997年) 159~160頁。胡風(1904~1985年)本名張光人, 1928に日本慶応大学留学, 中国左翼作家連盟, 1933に抗日レジスタンス運動で強制送還。1955反革命で逮捕, 80年名誉回復。
- 53 阿壘(アロン)「作者による解説」『南京慟哭』(五月書房, 1994年) 219~220頁。阿壘(1907~1967)本名陳守梅, 杭州生。上海戦役に国民党将校として出動, その後延安抗日大学で学び, 西安で『南京慟哭』執筆。「胡風冤罪事件」連座, 逮捕, 12年後天津監獄で病死, 1980年名誉回復。『南京慟哭』の著者紹介の要約。
- 54 前掲, 『火野葦平著作目録』120頁。このロシア語版は日本の古本屋でも販売されていた。
- 55 南田みどり「ビルマ作家たちの『日本時代』」(大阪大学世界言語センター論集, 2012年3月8日)を参考, 引用した。1942年新刊書籍の翻訳『花と兵隊』『土と兵隊』303頁, 1944年翻訳『麦と兵隊』306頁。
- 56 ルイス・W・ブッシュ: 1907年ロンドン生まれ。仏教と日本史研究の為, 昭和7 [1932] 年来日, 弘前, 山県両高等高校で英語と英文学を講じて学生に親しまれる。1940年, 英海軍士官として従軍, 香港陥落で日本軍の捕虜となり, 各地の収容所を転々とした。著作には, 日本事物辞典等の外, かね夫人との共訳による友松円諦博士の仏教に関する著書, 火野葦平氏の『麦と兵隊』その他の翻訳がある。前掲, 『お可哀想に 東京捕虜収容所の英兵記録』「著者紹介」。
- 57 翻訳者・井上思外雄「Translator's note」『CORN AND SOLDIERS』(麦と兵隊) (研究社, 1944年) viii 頁。
- 58 前掲, 火野葦平「解説」『火野葦平選集』第二巻, 435頁。
- 59 石本静枝「アメリカの『麦と兵隊』」『改造』8月号(改造社, 1939年) 178~181頁。
- 60 同前, 翻訳の了解の件は178頁, 火野作品の評価は, 178~179頁に主として記載。
- 61 ドナルド・キーン「火野葦平」『声の残り 私の文壇交遊録』(朝日新聞社, 1992年) 12頁。
- 62 渋谷豊「対外宣伝誌としての『フランス・ジャポン』」和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』(ゆまに書房, 2012年) 89~104頁。同誌は1934年10月創刊, 1940年4月終刊。
- 63 渋谷豊「フランスにおける日本文学受容の一側面 火野葦平の場合」(科学研究費基盤研究C「两大戦期間フランスにおけるジャポニザンの活動」から。)『信州大学人文科学論集』第4号2016年9月6日) 141~153頁。
- 64 松平齊光はパリ大学博士, 『フランス・ジャポン』の編集に参加。『土と兵隊』は『Mud and Soldiers』(K & L. W. Bush 訳, 研究社, 1939年)からの重訳。
- 65 前掲, 和田桂子「『フランス・ジャポン』—その誕生から終焉まで」『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』(3~30頁)。
- 66 ビタルク・フェルナンデス・パウ(早稲田大学学術准教授)による2017年度多元文化学会(秋季大会)「グローバル化する日本文化」シンポジウムでの講演である。火野葦平に関するのは48~49頁。